

# 2173再構築 16

3ビナー：理解

エリー

### 3 ビナー：理解

#### <調べた言葉>

りかい〔理解〕

きょうかん〔共感〕

どうかん〔同感〕

かんじょういにゆう〔感情移入〕

なんみん〔難民〕

なんみんじょうやく〔難民条約〕

-----

理屈を解するという意味で、道理についてだけいうのかと思ったら、感情や立場についても「理解」を使うと知り、意外に思う。

確かに、「君の立場は理解した」とか、使うからね。

理解にも程度があって、「教えられた大枠を知る」を一番浅い理解とするなら、「あるがままの状態から、細部にわたって自在に対応できる」を最高の状態としよう。

実際には、いろいろなケースがあって、一言にはまとめられない。

しかし、「多くの場合、これが起きる」というような「パターン」を得ることができる。

誰かが調べたパターンを、「そういうもの」として教えられて、「なるほど」と思う時、一応、「理解した」と使う。

しかし、暗記したわけではないから、すぐに忘れてしまう。

また、自分でパターンを見つけ出したわけではないから、例外部分を知らない。

「分かった気分になっただけ」で、何かの役に立てることはできない。

このレベルの理解では、仲間と冗談を言い合うくらいにしか通用しない。

聞いたことを話して、それでおしまい。

聞いたことを覚えていて、広範囲にカバーできるならば、「どんな話題にも乗ってくる人」として、よい聞き手になれるかもしれない。

定期的・定量的に経験を繰り返して、「普通」を知り、すぐに応じられる状態になると役に立つ。

さらに進んで、教えられてないことに気づいた時、その意味をどう判断するのか？

「わたしはこう考える」と言うことはできるが、その真偽は、その時点では誰にも分からない場合、孤独を抱えることになる。

-----

誰かがパターン化した結論を、「へえ～」と感心して聞いて、まだ聞いてない誰かに得意になってしゃべって終わり。

それでは、どれだけ知っても、身についてはいかない。

自分でも一度考えてみる必要がある。

誰かが考えた答えを言われるままに暗記するのと、自分でもゼロから考えてみて同じ結論に達するのでは、理解度がまるで違う。

時間はかかるが、自分でも考えた方が応用がきく。

何も考えず、言われるままに、ふんふん、と聞いているだけでは、問い返されても説明できない。

自分でも一回考えてみたことは、その経験があるから、「自分の場合はこうだった」と話すことができる。

自分の中に世界を作り上げる作業をしなければ、どんなにAならばB式の答えを知っても、自在に操れるようにはなれない。

生命の樹のセフィロトを、2173再構築に合わせて考えているのも、自分の中に世界を作るため。

役立つかわからないが、魔術の本と、法の書を読む前に、自分でも考えておきたいからしている。

大枠から細部までカバーしようと思ったら、とても時間がかかる。

しかし、その手間を惜しんだら、自分の世界は生まれない。

-----

「理解」と「共感」がどう違うのか調べてみたら、「自分のことのように追体験している」の

有無らしい。

「あなたの場合はそうだと理解する」という言い方をすることはできる。自分は違うが、あなたはそうだと信じる、みたいなニュアンス。

「あなた自身になったように、わたしも共感した」という言い方はできる。あなたも、わたしも、同じ状態にある。

理解は、本当に分かったのか疑わしい。

共感も、本当に同じか疑わしい。

それでも、確かにそうだと感じることはあるのだろう。

同じ理屈を共有していて、同じ感情を持っている時、同じ判断を共有できる。

理屈が違ったり、感情が違う場合、判断は異なってくる。

2173再構築は、ファンタジーだから、一つの大前提に支えられた世界として、統一した見解がある。

ずっと漠然としていてなんだか分からなかったが、このメモを書いていて分かった。

-----

血縁関係のある小さな集団が、互いに支え合って、生計を共にしている。

狩猟と採取で生活しているなら、「食糧のある場所」を求めて移動することになる。

農耕を始めて、定住したなら、守り、伝えていくことになる。

もし、今の土地だけでは足りないとなったなら、開墾して田畑を増やすことになる。

「耕せば自分の土地」と言われて、全国に散っていった。

しかし、自給自足を基本とする制約の多い暮らしから、お金で物を買うことが中心になって、農業よりサービス業の比重が増していった。

人に対するサービスは、人が集まっている場所でなければ成り立たない。必然的に都市部に集中する。

衣食住に関するものは、「なし」では暮らせない。だから、確実に需要があるが、その分、競争も激しい。

サービス業に関しては、あっても、なくても、困らないが、一度便利さを手にしたら、二度と元には戻れない。

一人が大量に生産できるならば、そしてそれが安くて品質がよいなら、わざわざ高くても品質の悪いものを買う理由はない。

一度に何でもそろそろ安売りスーパーの出現で、商店街が消えていったように、淘汰されてしまう。

最近では、贅沢の象徴のような存在だった百貨店も、ネット物流に押され気味。

ネットで買い物できるようになって、地方だからといって困ることは少なくなってきた。珍しい本も、数日で届く。

自分の土地を求めて、開拓して、各地に散っていた人々が、都市に戻りつつある今、田舎は空白地帯になりつつある。

その状態は、防衛という観点から見て、よいことなのか、わるいことなのか。

知らない間に、「水源地が外国の支配下にある」とか、「密入国者が山に潜伏している」とか、そういう状態にあっても、そこに住みついている人がいなければ、知らないままで気づかない。

それは、国が内側から崩される恐れのある、危険な状態。

だから、全国を保護区と定めて、自由な売買や人の出入りを禁止する。そして、資格を持った人間を全国に配置する。物流ネットワークを構築する。

過疎の村に人為的に人を配置し直す。

彼らは主に林業や農業を行うが、そこで暮らしつつ、担当する地域を見回るといった役目を引き受けている。

その流通網は、トラックなど車が主体。

鉄道網に沿って、国内都市が作られる。

国内都市は、日本人限定で売買ができる自由区。出入りも日本人限定。

東京、横浜、名古屋、大阪、博多の5つの都市は、外国人にも解放される。

保護区には、外国人は入れない。

国内都市は、観光目的なら、入場料と案内付きで、期間限定で入ることができる。

資本主義部分は、国際都市、国内都市が担う。

いい人が、いい人として生きられるのが、保護区。

「日本人が、そこに住んでいる」という状態自体が意味を持つ。

聖別されているわけだから、制約も多い。

それでも受け入れて、国土保護のために一生を捧げる人を想定している。

基本的に、空き地に配置されるわけだから、強制移動とかは起こらない。  
土地の利権の整理があるかもしれないけども。

「全国各地に散らばって、実際に住む着くことが必要だ」という考え方は、全員が共有している。

しかし、実際に住むのか、住まないのか、選択することはできる。

住むを選べば、労働力で提供する側になる。

住まないを選べば、金銭支援する側になる。

-----

役割は交代制だから、休みはある。

センターまでの道路網は整備されているから、国内都市にバスで移動することはできる。

夫が自由区、妻子が保護区にいる場合、保護区の知り合いに子どもを預けて、休みの日に妻が自由区の夫の元へ会いに行き、二人目、三人目を授かることはできる。

独身の男女が、自由区の恋人に会いに行くこともできる。

しかし、多くても半年に一回くらい。

ネットではつながっているが、それで「互いに浮気しないか？」は、保護区の人たちは聖なる存在だから理性的に振る舞うという前提で成り立っている。

自由区の人たちが、自由恋愛をするのは自由。

しかし、狭い地域に顔を突き合わせて暮らす保護区の村人の間で、色恋沙汰があると厄介。  
恋愛をしてはいけないわけではない。

本人の意志で関係を持ったならいいが、密室の圧力で強要されたなら、許されざる出来事。

でも、「いい人」想定なので、むしろ、気まづくなった時のことを考えて、好きでも好きと言えない問題の方が重要そう。

一度保護区に出て、仕事と恋愛をして、妊娠したら保護区に戻って、子どもを育てる。  
というのが、一般的な女の人の生き方。

選んだ職業で、最初から保護区か、最後まで自由区か、わかれるのが、一般的な男の人の生き方。

妊娠のハードルが下がるわけだから、結婚する必要は全くない。

二人目、三人目が、違う父親の子どもでも構わない。

それでも、あえて「結婚する＝生涯を誓い合う」という選択をする人は出てくると思う。

林業や農業や山男として働くことが、男性の仕事の中心となる。

教師や給食係という可能性もあるが、条件付きでない場合、人手が足りないところに配置されるので、女性が給食係に配置されるケースが多い。

医者が教師や保育士などは、資格が必要。でも、求められれば、手の足りないところの手伝いをすることもある。

ララのようなデスクワークのみの条件付きは珍しい。無理して卒寮するより、リタイアして管理区で軽労働をしながらグループで暮らすことを選ぶ人の方が多い。

寝付いて一週間以上経ったら、自動的に管理区の病院に移動される。

設備の充実した都市部で看護されて暮らす。

基本的に延命治療はしない。

治せる病気は治すが、治せない病気は治療しない。痛みを緩和して苦しまなくて済むようにするだけ。

日本国土を守るために働く人＝聖なる人、と考える。

海に守られて、簡単に外から入れなかったころとは違う。交通手段が発達した今、一度入り込んで、潜伏されたら、探し出すことは難しい。

-----

普通の人には、サバイバル能力がないので、山に潜伏ことは出来ない。  
都市にまぎれる。

なぜ、国土に人々を配置し、監視する体制を整えたのか？

【密入国者の流入で、日本民族としての存続が危ぶまれる出来事が多発したから】

というイベントシーンを追加したら、説得力は増すが、話が緊迫しすぎる気もする。

「国土の隅々に人を配置して、生活すると同時に、監視することが必要」という結論に対して、「なぜなら、交通手段の発達により、もはや海は守ってくれないから」という理由が成り立つ。

それを全員が、「必要」と理解することが、変革のきっかけ、という世界のファンタジー。

締め出し対策をするわけだから、どこかで線引きする必要がある。

日本国籍を持っていることが最低限の条件になる。

だから、ハーフでも日本国籍を持っていればOK。

つまり、「子どもはOKで保護区に入れるけど、親はNGで保護区には入れず、国際都市で暮らす」というパターンも出てくる。

始めた瞬間は、誰も資格を持っていないから、日本国籍を持つ人で40歳までに3年間の労働力提供をすれば、保護区に配置されることができる。

それ以降は、13～15歳の間、入寮して、工業勤務を勤め上げた人に限られる。

日本国籍を持たない場合、国際都市に移動させられる。

保護区には日本人しかいない。

国内都市には、生活している日本人と、観光で訪れた外国人がいる。

国際都市は、いろんな人が住んでいる。

国都を守ることを大前提としているため、原発を田舎に配置することはない。

作るなら自由区。しかし、人口の集中した場所に作ることはリスクが大きすぎるので、作らない方向でまとまる。

地熱とか、風力とか、波の力とか、そういうものを生かす方向に進む。

最新技術を導入して、機械化して、どんどん巨大化、先鋭化していくのは、自由区でやればいい。

保護区は、安定した技術を安価にトレースして使う。最新でなくてよい。

「安全は与えられるものではない。自ら行動しなければならない」という意識改革がもたらしたファンタジー。

山男は、自然を守るレンジャーだから、人を相手に戦闘することはない。

しかし、潜伏者を見つけて、監視する役割は担っている。

見つけたら、管理区に報告して、取締り部隊が駆け付けるまで監視する。

スズは、いつも矢と弓を携帯している。

しかし、それは山で自給自足するために、うさぎを獲ったりすることに使う。

殺傷能力はあるが、人を殺すための道具ではない。